

情愛・殺意のメモリー

ふたしかな結末

平 龍生

1

東京都心部からは西郊になる石神井（しゃくじい）は静かな住宅街だったが、開発されるのが早かったせいで、あちらこちらに、古いアパートなどが目につく街であった。

空き地などもある一郭に平屋建てのアパートがあった。樺（けやき）の木が一本、庭先に残されるようにして立っていた。

夜半のことで、この木造アパートの六畳間には、外からの、車のライトが時々届いた。近くの道路が辻道で、車が行き来する度に、ライトの明かりが投じて来るのだった。

けやきの木は、初冬のこと、枯れ枝だけの裸木になっていた。

その網の目のような枯れ枝の影が、六畳間の磨（す）りガラスの窓には映っては消えた。部屋の隅にはベッドが据えられており、男が仰向（あお

むけ) けになり寝ていた。

絨毯(じゅうたん)の上に、足を投げ出した姿勢のままに、さつきから、独り、葉村美子(よしこ)はお喋りを続けていた。

「裕司、もう、うるさいと言わない?ね、ほんとうに死んじやったの?わたしを驚かせようとして、また、死んだふりをしているんだあ」

男の寝顔とは、目の位置になるので、美子が手を伸ばした。暖かさを指先きで確かめた。男の名は、戸村裕司、二十七歳、ふだんは眼鏡を掛けていたが、いまは外していたので、瞼が腫れぼったく見えた。

その裕司の首には、紐状になったタオルが巻きついていていた。

少し、裕司の首は伸びたようになり、顔は壁際に向けられていた。

苦しそうな表情ではなく、軽くだが、裕司は鼾(いびき)を掻(か)いるようでも思えた。

男の傍に寄り添っている葉村美子は二十三歳になる。肩の下まである長い髪を、時折り、左手の指で掻き上げるようにした。

ふっくらとした顔立ちで、どこか、稚(おさな)さが、その横顔には残っていた。唇をすぼめ、そつと、美子は裕司に口づけをした。

両手で、愛しげに、顔を抱え取り、さらに、唇を重ねた。

「あしたの朝、目が覚めたら、このまま、死んでいたらいいなって、裕司、この前、口にしたよね。ずっと、美(みい)がそばに居て、見守ってくれている。そうなら、ぼくは赤ん坊のように今夜は眠るだけだって」

二人の仲では、よしこは「みい」と呼ぶのが慣(なら)わしだった。美を「みい」と読む。英語のMIに引つ掛けてのことだった。

ベッドの際(きわ)には、小さなグリップホルダーのブックランプが一つと灯っていた。外から届く夥(おびただし)い車のランプが、時折り、室内の様子を映し出して見せた。

この時、すでにして、裕司は息を引き取っていたのだが、そのことには、美子が気付いたふうはなかった。

つまりは、夢現(ゆめうつ)の中、美子は死体に添え寝したままに、あらぬ会話を続けていたことになる。

風が出たのか、けやきの枯れ枝が揺れていた。

その影が、乱れた女の髪を、天井に写し取った。外の道を行き来する車のライト光がまた浮いては消えた。その度に、美子の影も歪んだものになった。ひゅ、ひゅゆっと、風音が高まった。

だが、美子の耳には、一切、それらの「外界の物音」は聞えてはいなかった。

(わたし、寂しそうにしているのに、江崎さんは、わたしのこと、明るい女の子で、付き合っているも気が楽だよってえ。わたし、そんな女の子じゃないのに)

何となく、そんな言葉を思い浮かべていた。

実は、この夜、裕司が自分のアパートを訪ねて来たのは、美子にとっては有難迷惑でもあったのだ。この、土曜日の夜、本当は美子は江崎正春との逢瀬を愉しむことになっていた。

それなのに、江崎には相手にされず、美子はがっかりしていた。

その合間に、裕司がアパートに転がり込んできたと言うのが、今夜の経緯であった。二人の出会いの始末だが、言うなれば『腐れ縁の仲』で、裕司と美子は愛し合っているというでもなかった。

江崎には抱かれの一度だけである。

妻子のある三十六歳、美子が勤める就職情報サイト会社の上司で、江崎は部長職、美子はその部下の間柄であった。たっぷり、時間を掛けて導かれたので、美子の性の感応は違ったものになった。

男遍歴は、そこそこ、美子にはあったが、体で男のことを意識するようになったのは、この中年男が初めてのことで、それなりに、次のチャンスでもいい思いをしようと、美子は期待していた向きもあったのだ。

髪を撫でたり、口づけをしたり…そんな抱く時の順序を省き、いきなりに、江崎は美子を全裸にして仰向けに寝かせた。そして、覆（おおい）いかぶさるようにして、肌と肌を合わせ、裸身に触れて来た。

「美子ちゃんの、このきれいな体には生毛（うぶげ）がいっぱい生えていて、その生毛をくすぐられると、女の子はとても気持がよくなる。いいか、美子ちゃんの体の上にさ。わたしの体を置くようにして、そそーと触れる

感じのテク、さあ、瞼を閉じるんだ。初めて触れられる時の快さを、美子ちゃん自身の生毛で感じ取るんだよ」

体を合わせる前に、江崎が美子に告げた。

大層なもの言いだったが、すでに、美子は言葉で犯されていた。美子は言われるままに、期待感も含めて目を閉じた。

両腕で自分の上体を支えるようにしながら、江崎は美子の裸身に体を合わせて来た。しばらく、じっとしていた。

そうしておいてから、次に、江崎は下半身の方からを体を寄せるようにした。そちらに美子の気持ちを注力させた。

男の勃起したものが、触れるともなく美子の太股あたりに触れた。

思わず、美子は瞼を瞬（しば）たかせた。

なおも江崎の上体は浮いていて、腕立て伏せのポーズをしながらに遊んだ。とても、巧みで、心得ていた。美子は焦らされてもいたのだ。

触れるともなく触れて来る、江崎の「合わせの上体」が美子の体の上に

被（かぶ）さった。なお、間が置かれた。

やがてのこと、江崎の上体が、美子の上半身を撫でるようにしながら、ゆっくりと、重なって来た。「ふわ、ふわわ…」そんな喘ぎ声を美子は漏らしたようだった。

へその上から、乳房のあたりに掛けての、柔らかな皮膚がそよぎ立った。羽毛で逆なでされたような感覚が生じていた。

次には、乳房全体が覆（おお）われた。そうやって、少しずつ、乳房の形が崩された。江崎の胸が美子の乳首に到達した時、微かに、美子は首を振った。そこは敏感な性感体だから、ことのほかの触れの感触に、すっかり、美子は夢中になった。われを忘れた。

自分の方から、両腕を上方に向けて差し出した。そのままに、江崎の上体を抱え込んだ。江崎の前技の総てが、このペースだったので、焦れされた挙句に、挿入本番は、美子が求めてのこととなった。男根を嵌め込まれた時には、すでにして、ぴくぴくと膣道が蠢（うごめ）いていた。早々にイク感覚に襲われて、よくは覚えてはいないが、美子は「イクウ」と、何度も発情の声を発したようだった。

果てた時は口が利けなくなっていて、体全体が浮いたままに、半ばは、気を失っていた。これからも江崎に弄ばれたいと美子は強く思った。

それなのに、待ちに待った土曜日なのに美子には江崎からの声が掛からなかった。この週末、大阪に出張していて、江崎が忙しいのは分かっていたが、男と女の情としての、外されたと言う思いは強かったのだ。

「こちらから連絡するなんて」の、美子なりの強がりの想いもあって、結局、自分の方から美子は江崎に連絡することはなかった。

寒々とした秋の夕暮れ時に家に帰り着いた。ストーブが点いていない部屋は寒く、身震いした。コートは脱いだ、着替えはせず、ストーブの灯も点けずに、セーターのままにベッドの毛布にくるまった。

やっぱり、江崎のことが気になった。家に帰っていると思われる午後七時頃には連絡して、今日はともかくも、明日の日曜日には会える算段を整えようと美子は思っていた。

それでも、予定の時刻になっても美子は連絡出来ずにいた。「割り切った大人の男と女の仲、お互い、干渉しなのが一番さ」と、初めに、江崎は釘を刺していた。その時は、分かったふうの顔になり、美子は明るい調子で、納得したふうの口を利いたのだった。何を今更にであった。

連絡出来ぬままに、なおも、美子はベッドの上に寝転がっていた。

「なあんだ。つまんない。わたしって、いい子しちゃって。なによ」と、自分に怒りを向けた。「わたし、欲しいな…」と、女の台詞ではないような文句も口にした。

毛布の端をしっかりと握り締めていた。

ぬるみの生じ立って来たひそみに手指を伸ばしようとしたが、自分の指の冷たさに、そんな気にもなれず、止めた。

「わたし、江崎さんのこと、好きになっているわけじゃないわ。奥さんにだって嫉妬しているわけでもなし。わたしの体を弄ばれない？ 凄いな、わたし。こんなこと考えているのだとしたら、たった一回だけのことなのに、江崎さんて、大人よね。わたしだって、背伸びして生きたいって言う思いはあるものお。それで、江崎さんこと、気になっているのかしら…」

その内、美子は眠りの世界に引き摺(ず)り込まれそうになった。だが、

意識だけは生きていて寝付けず、何やら、「とめどもつかない事柄」に thoughts を巡らせていた。

2

真夜中に近い時刻になっていた。

風の音に美子は目覚めた。

また、一人であることに思いを至した時、みぞおちのあたりが、きゅーんと締まった。枕元の目覚まし時計を見たら、十一時四十五分だった。

忘れていた男の名を思い出した。

戸村裕司の顔が浮いて出た。嫌な気分になった。経過を記すと。この週末、裕司から会いたい旨の連絡があったのだが、美子には自分本位の、江崎と会う思いがあったので断った。裕司を避けていたのだった。

この男と付き合い合ってから五年が経過していた。

何となく、二人は慣れ合った関係であった。

それだけに、お互いの欠点も大方のところは承知している。いまは、その欠点の方が目についたが、相争うほどのこのことでもなかった。

いま頃は、このアパートを指して裕司は車を走らせているなど、ちらと、美子は考えた。気安いと言うか、自分家（じぶんち）のように、裕司は振る舞う癖があり、留守の時でも、合鍵を使って入り込み、ベッドで眠

りこけていたりする。横着と言えば横着な振る舞いだったが、よく、考えてみると、美子を見張る思いもあるらしく、ある種の独占欲も持ち合わせた男の面もあるようだった。

ただ、何となく、鬱陶(うつとう)しく、「二人の間はこのままいいの?」と言った意味の謎かけ文句は何度かお互いが口にしたことはあった。

結婚を美子は求めているのではないので、男と女の関係は解消したいと言う手合いの話となるのだが、その度に、裕司は焦点をぼやかすので、この話は進展していた訳ではない。

裕司の親は神奈川県の東京寄りの網島で、酒屋を経営していた。

裕司はその手伝いをしており、店が終わってから、車を発進させると、いつも、このアパートに着くのは真夜中になる。「今夜もそういうことなのか」と、美子は思っていた。

「自分の女と言うように、いつも考えていて、女がそれに従っていると、いつか、そう思い込んでしまうタイプよね。自分は気が付いていないと思うけれど、そう言うのって傲慢なのよ」と、自分なりの不満を美子は独りごちた。先週、一晩家を開けた時も、ちゃんと裕司はこのアパートのベッドで寝ていた。

朝帰りになる美子と顔を合わせた時は、問い掛けの文句を隠したままで、裕司は美子を迎えた。その時のことだが、煮え切らない態度のままに、微かに、裕司は意味不明の笑みを漏らした。そうやって自分を誤魔化した。

「あーあ、何だか、かつたるーいわ」

漠然とした、もの言いだった。美子はベッドから出た。部屋が寒いので、美子はぶるつと一つ身震いをした。携帯を取り上げたら、「いま、そちらへ」との裕司からの短いメールが入っていた。

「そちらって、どちらよ？そっか、ここがそちらか」

怒りを含んだ文句になっていた。独り呟く。

携帯を手にしたのは、江崎にメールしようかどうかと迷ったからであった。その癖、それ以上は操作するのは止めた。

寒いから、室内でコートを羽織った。携帯片手に所載（しよさい）もなく、部屋の中をぐるぐると巡った。独りごちる。

「江崎さん、わたしはもう会って上げない。わかった？だから、連絡する必要はないの。可愛い女の子を放っておくとね、そっぽ向かれちゃうから。わたしのこと、好きになる男って、結構いるのよ」

強がりなことを美子は言った。

明かりは灯していないので、ほぼ、真つ暗闇であった。空中に翳（かざ）し、握り締めるともなく握った携帯を掌の中で弄んだ。

「わたし、今度抱かれる時、江崎さん、今度はわたしに任せてとか言ってみようかしら。でえ、わたし、どうするかだな」

淫らなことは頭を巡ってはいるのだが、具体的な事柄は、何一つ、沸い

てはこなかった。

ひとわたり、ライトがひらめいた後、車の音がした。裕司の車が到着したらしい。勝手知ったふうに、裕司は振る舞った。

がちやがちやと、合鍵が鍵穴に入り込む。

まるで、下半身にそのまま手を突っ込まれるような不快感を美子は覚(おぼ)えた。

「ああ、ミイか。また、真っ暗闇で居ないかと思ったよ。二週続けてのことで出掛けているのかと、つつい、考えちゃったよ。でも、いいよ。ミイはいつもの通りのミイ」

妥協の文句の述べ方も、裕司らしく歯切れが悪い。返事はせず美子は不愛想に裕司を迎えた。ぼおっと、美子は玄関口に立っていた。

さっさと動き、まず、部屋のスイッチを入れると、次に、裕司はストーブに火を点した。

もっと、手慣れたふうに、キッチンに行くと、薬缶で湯を沸かし始めた。きびきびしてはいたが、一通りのことを済ました後は、女と体を合わせる時間が来るのだと信じているふうの所作、美子は相容れないものを感じた。ストーブも赤々と灯った。やがて、ちんちんと音を立てて、湯が滾(たぎ)った。

この後、いつものことだが、裕司は余裕有り気にドリップコーヒーを淹

れた。薫りが沸いて立つ。旨いコーヒーが用意された。

ストーブに手を翳し、コーヒーカップを口に持ってゆく。二人ともブラックコーヒーで嗜(たしな)んだ。お揃いのマグカップは、いつか、二人で陶器の里、益子(ましこ)に行った時に、裕司が買い求めたものだった。「あの、少し、今夜は話をしてもいいかな。ミイ、少しは体は暖まったかなあ、ゆつくりとき。今夜は話をしてみたい気分なんだ」

「何を? どういうこと?」

不機嫌な口調で美子が裕司に応じた。

「ほんとうに二人は別れるべきかなあ。ぼくとミイは五年の間で、まあ、色々あったけれど、セックスの関係で、いちばん多く抱き合った仲だよ。そうだろう? それなりに、二人は恋もして来たんじゃないのか。同じことを、もう一度、違う相手とやり直す、とても面倒なことと思わないか。ミイはミイのことをいちばんよく分かっている男と結婚をして、子供を産んで、それでいいんじゃないかと、ぼくは考えるようになった」

神経質そうな細面と、メタルフレームの目立たない感じの眼鏡、重そうな一重の瞼(まぶた)、全体に自信がなさそうな面構えであった。喋り口も、どこことなく頼りない。

何度目かのことであったが、この前、会った時も、二人の間のことを、「事の成り行きってこともあるし」と、付け足しのような口調で喋った。

その時は、美子が話の相手にならなかつたので、会話は途切れた。

その話が、また、始まっていたのだった。

美子はカップを両手で抱え取り、裕司の目も見返さなかった。黙っていた。

頭の中で、裕司の言葉尻を探った。

(このまま裕司と結婚したらー平々凡々の小さな幸せがあつて、裕司のご託宣通りに子供を産んで、〃それでいいじゃない〃という人生をわたし過ごすことになるんだわ)

もう一つ、具体的に日常生活のことを考えれば、いずれは、裕司が家業を継ぐはずの酒屋を手伝う羽目となる。「店を張っていて、そこそこ客もあつて、結構な商売に見えるらしいけれど、傍目(はため)に羨ましがられるほど楽じゃない」と言うのが、裕司の口癖で、美子も同感であった。

二人とも二流大学の文学部卒で、先輩と後輩の間柄であったが、希望したマスコミ関連の仕事には就けず、嫌々、裕司は家業を手伝っているというのが実情でもあった。

ここ三年の間、就職先を求めて裕司は何度かトライしていたが、意の通にはいかず、あきらめ気分のままで、〃情けない男〃に成り下がっていた。その分、裕司は食い足りない男と言うのが、美子の思いであった。覇気のなさも気に入らなかった。

「そうやって、いつもミイはぼくを無視する。いや、ぼくを遠ざけているのかな。ミイ自身のいまの気持ちや、これからの二人のことについての考

え方を示してもらわねば何も始まらないよ。もっと、二人の関係が悪くな
ってしまおう」

やはり、返事はせず、美子は黙っていた。

裕司が美子のカップを取り上げた。ゆつくりとではあったが、どこか、
わざとらしい。次に、裕司がすることは美子には分かっていた。不都合な
状況になると裕司は変わり身を見せ、スキンタッチを求めて来るのだった。

「ことばでさ。傷付け合うことはないのに。ぼくの悪いところさ」

そんな言い訳もこの時は用意した。

坐っている場所はベッドしかないのだから、いつだって、男と女の関係
になれた。すつと、裕司が手を伸ばして来た。美子の肩口に手が触れた。
覗き込むようにして裕司が美子の顔を見た。その手を邪険に振り払おうと
思ったのに、美子はそうはしなかった。

どこか、江崎の代役として裕司を見ているところがあった。それなりに
裕司も代役をこなした。いつもの通りにであった。

ベッドの上に二人は倒れ込んでいた。

それでも、もう一つ気分が乗らない分、美子は事々に邪険さを示した。
唇を合わせて来たのを避けたり、親切さを示したりすると、これまた、身
を躲（かわ）した。

薄目を開け、美子は裕司の顔や身振りを観察した。大体のところ、いつ
もの通りであった。セーターを着たままだったのが、裕司によって脱がさ

れた。邪魔物を取り払ったかのようにだった。

そのままに、裕司は顔を埋めて来た。

赤ん坊のように、「ちゅ、ちゅつ」と、舌音を立てる。下品だった。乳首の吸い方も下手で少し痛かった。

ついついと、江崎の舌先の微妙な動きと比較しながら、時を過ごした。

早々と、性急に、裕司は体を繋（つな）いで来た。やはり、いつものようにであった。

「この感じだよ。二人だけの。なあ、ぼくたちは離れられるわけがないよ」

(…まあね。いまのところはでしょ)

相槌（あいづち）打つまでもない美子の独り言だった。唾を呑み込むようにであった。何度か、頭の中で、呟くと、美子はおのれの言葉を嚙（の）み下した。どこか、気持ちが悪い嚙下（えんげ）の法だった。

そして、裕司に取つての終わりの時間がやって来て、二人の体は離れた。さつさと、裕司は立ち上がり、咽喉（のど）が渴いたのか、キッチンに立った。水道の蛇口を開いた。

コップに水を注ぎ、ごくごくと水を飲んだ。裕司の尻だけが見えた。貧相な尻の形だった。いやなものを美子は見た思いになった。

その、若者の半身とは思えない下半身がこちらに向いた。萎え、力を削（そ）がれた男のものが股間にはあった。美子は目を背けた。

「土曜日の夜は、商店街も人出が出るからさ。大忙し、結構、疲れてしま

う」と、誰にともなく言い、裕司は美子に背を向けたままの姿勢で寝入った。「おやすみでもないか、何もかもお疲れさまなんだ。この男性（ひと）って…」

定かならぬ思いのままに美子は繰（く）り言を口にした。詮（せん）無いことであつた。

大きく、美子は目を見開いていた。何回か、天井を外からの車のライトが通り過ぎた。何となく、アパートの一室をひとわたり見渡す。赤々と灯つたストーブ、その先には、白で統一した家具調度品が置かれている。

鏡台、箱型のユニット家具、それに本箱などであつた。

本棚には、小説本が何冊か並び、隅の場所には、卒論のテーマで付き合つた薄幸の歌人の歌集などが並んでいた。そして、壁には、好きなグループサウンズのポスターが一枚貼つてあつた。

（こんな夜は、また、蜘蛛の糸が掛かるのかしら？）

と、美子は考え始めていた。

顔の前に、五本の指を突き出し、それから眉間（みけん）から目のあたりをこするようになった。鬱陶しい思いが兆（めづ）りして、その白い靄（もや）を払い退（の）けたくなつた。

少し前に、裕司とは「蜘蛛の糸」については話を交わしたことがある。

ある種の精神分裂症の患者などは、目の前に「蜘蛛の糸」が張っているように見え、しきりに、「蜘蛛の糸」を取り払う仕種を見せるといふ。裕

司の説だった。これは、いわゆる鬱症の症状の一つともされる。

自分が正気だということを確かめるために、“小さな物語り”を、美子は頭の中に用意した。初めに思ったことは、このままでは、裕司に捉えられた女になり、絡（から）みの糸に巻き付かれてしまうということだった。（わたしの人生なんだからあ。どうして、他人と一緒にされなくちゃいけないの）

と、美子は自己主張もして見せた。

獰猛な感じの蜘蛛と言うのでなく、いそいそと、巣作りをする蜘蛛を思い描いて見たりもしたことがあった。こういう時の蜘蛛の在り様は、きらきらと光る朝の光景に身を添えているものなのだ。

朝露の白い玉も蜘蛛の糸には懸かっけていて、一日の始まりがここから始まることもあった。

（ところで、ところで…朝から、鬱陶しいお天気の時もあるわよね。うーむ。まあ、何てことはないけれどお）

思いが交錯するのが、この思考の危ういところであった。行ったり来たり、止どまつたり、気分が引いたり寄せたりするのであった。

「そっか、そっか。自分で掴み取ればいちばんいいんだ。そういうことよね」

そう呟くように言い、目の前にあるものを美子は掴み取ろうとした。両手を差し出す。ぐるぐると幾つかの輪を描いた。

裕司が美子に対して発した文句が反芻（はんすう）された。『蜘蛛の糸』
“ について交わした二人の言葉を美子はなぞっていた。

“ 何か、目の前にさ。幻影のようなものが浮かんでさ。それを掴み取ろうとするらしい。いや、もやもやした蜃気楼（しんきろう）のようなのが目の前で行き来するものだから、それを掴み取ろうとして、空（くう）を掻くって、鬱症の症状例のことが或る書物には書いてあった。何となく、分かるような気がしたよ。ぼくもその嫌いが無いわけじゃない。よくは分からない。ほんの少しだけどね”

この話からして大体が要領を得ない語り口であった。『蜘蛛の糸』の話は、二人が共有しているのだけは、美子にも分かっていた。

『蜘蛛の糸』の話の流れから、その時、男女の仲の話も出たりした。

糸を紡ぎ出すのは女で、ついついに風に吹かれるままに、男はクモの糸に身を委ねてしまう人種、それはそれでいいのだが、「女は自分で張ったクモの糸なのに、そこからの逃れようとしたりすることから間違いが起る」ってことに裕司の考えではなるらしく、「そんな思いを持ったところで、さうだな。あんまり、そう遠くに行けはしないのに…。精々、その何だ。何歩か出たところでき。よちよち歩きをしていると、天敵に喰われてしまったりしてえ。まあ、これは、世間知らずの女の子の話だけどさ」とも、裕司は付け加えた。

（馬鹿だよね。せっせ、せっせと、女が糸を紡ぎ出す内に、自分の首に何

重にも糸が巻き付いて、のっぴきならぬようになるのにい。何だか時間ばっかりが経つちやっつてえ。裕司ってさ。その辺のところ、理解していないんだわ)

どこか、焦点が定まらない文句を列ねながら、なお、美子は天井を見詰めていた。

「…わたし、本当はこの男がこの世からいなくなればいいんだと思ってるんだ。ふくとよ。いつの間にか、何のトラブルもなく。そっか、生きたままに、ずっと寝ているってのも悪くない設定よね」

空恐ろしい思いも、頭の中を巡り始めていた。「首を絞めたら、息をしなくなったりしてえ」と、愉しむような言葉遊びをした。

実のところ、この夜、二人は二度目の交合を、この後、愉(たの)しんだ。美子の方から挑んだ。それとはない前台詞を美子が用意して、体を繋(つな)ぐ行為に及んだ。

「ねえ、ね、起きなさいよ。そうやって朝まで寝ているつもりなの。自分だけ寝ているのって、それ、いい気な話よね」

「付き合うよ。眠いのを我慢して」

「よくは分からないけれど、わたし、今日は落ち込んでいるのかもね。そう、失恋してるって気分て言えば分かるかしら?これって」

「誰に?ああ、俺のことか。恋しているような恋をしていないような、ミイ、それが言いたかったんだらう?そう言えばそうかも知れないし。おれ

たちは…」

少し、面倒くさげに裕司は答えた。

「最後の最後に、名残り惜しげにすることかしら？裕司のこれって、もう、力がないみたたく、これじゃね。役立たず、ちよとは男らしくなってみたら？」

裕司のものを賦活（ふかつ）させるべく、萎えた一物を美子が口に含んだ。自分の体をいじめたくなり、美子は裕司の体を組み敷いたまま女上位で腰を沈めた。それでも、最初の行き来は挿入物の役目を果たした。だが、その都度、緩くなり、何度か、途中で外れた。

「寝ちゃうと、首を絞めちゃうわよ。眠気ばかりでしょうがないわね。まるつきり、緊張感なしじゃない。ほら、お目覚め、お目覚め、ほら、ほら、ほらあ」

その度に、美子は裕司の首を絞めた。

いじりまわした拳句に、一物は賦活した。美子が再挿入を図る。ひとところ、繋がれた。女上位で動く、腰を打ちつける音だけが、数回、繰り返された。また、美子の手が伸びて、裕司の首を絞めた。苦しまぎれに、下半身に力が籠った時、やっと、裕司は射精した。

のたりと、涎（よだれ）を垂らしたような反応の薄い果て方だった。

それが不満で、さらに美子は裕司の首を絞めた。ぐったりとなり、裕司の体は動かなくなった。もう、疲れ果てて、寝入ってしまったかのようにだった。

「そんなに眠いならずつと寝ていなさいよ。もう、わたし、起こして上げないから」

と、美子は呟いた。天井を見上げた時、外から届く車のミラー光が、また、ゆつくりと室内を走った。

それでも、いつとき、美子は寝入ったようだった。

すどん夢の中に落ちた。もつとも、起きているのか、眠っているのか、それすらも、美子は自覚していない様態ではあった。

3

日曜日の朝のことであった。寝ぼけたままに美子は目覚めた。

あたりを見回す。傍らに、裕司が寝ていた。

いつものように、外した裕司の眼鏡がベッド際に置いあった。

(そろそろ起き出して朝食の用意をする時間でしょ。裕司が…)

と、美子は口に出すところだったが、止(や)めた。

よく寝入っているように見えた。

揺すっても起きそうにないなと思った。

(昨日の夜はうんといじめて上げたのに、ね、ミイ、苦しいよなんて、裕司、言わなかった?もしかして、言ったのかな。裕司…)

何度か、自分が裕司の首を、タオルで締めた、セックスプレイのことを

思い出していた。その度に、少し小煩(こころる)さそうに、裕司は首を左右に振った。そう、美子には見えていた。払い退けるふうはなく、半(なか)か)ばは、眠りの中にあつたようなので、そう見えたのかも知れない。

「この前、同じなことをした時、このまま目が覚めることもなく死んでいたらいいなって、裕司、言わなかった?とんだ悪ふざけだけど、面倒臭くていいかもとか。本当は、眠るように死ぬるならそのまま続けてもいいよとか、裕司、そうも言わなかった?うーむ。違うか、ここはわたしの夢見物語なのかな…」

やはり、はつきりとはしない。時が過ぎて、朝明けの明るさが部屋に忍んだ。通り過ぎる車の音だけが時折り聞えた。

ぐったりした裕司の首には、しっかりとタオルが巻き付いていた。

蒼褪めた顔はもはや死人の肌色だった。戸村裕司はすでにして死んでいた。その事実を美子が知らないだけの話だった。

「わたしのお遊びが過ぎたのかな。いつまで寝ていたって、わたしが起こしちゃうよ。朝食の用意を裕司がして、このあと、石神井公園に行つて、バード・ウォッチングとかの予定じゃなかった?メールにはそのことも書いてあつたわよね。目が覚めたら、ゆっくりお散歩、ほら、お定まりのコース、ね、ねえ、ね、裕司はお休みにするう?起きる気がないなら、一人で行くつてコースもあるわね。裕司、今日はぶつつんにしちゃう?それなら起きなくていいよ。それこそ、目が覚めずずっと寝ていられるコース、

裕司のお望みだったりしてえ」

添え寝しているのが馬鹿らしくなって、美子はベッドを離れた。キッチンに立ち、冷蔵庫を開けた。牛乳。パックの牛乳を美子は口飲みで、ごくごくくと飲んだ。朝飯を作る相手がいないと、こんな程度の横着さで、大方

(おおかた) は、美子は朝飯タイムとしてしまうこともあった。

「そうだ。今日は日曜日、わたしにとっても休みの日、さあさ、お出掛けつてことにしよう」

部屋の中のことには興味がなくなり、一人、アパートの外に出る気になった。さつきまでは、ボード・ウォッチングのことが頭の中にあっただのに、江崎と会うつもりになってか、美子はおしゃれをした。念入りに、口紅を塗る時も、髪の手入れをする時も、鏡台に写る自分の顔だけを見ていた。

鏡の端に、ベッドの一隅が写し取られていたが、視野の内に止まったのでもなかった。

外出する時に習い、鍵を掛けた。

鍵音は聞いていたが、気にするふうでもなかった。

「もう一つ鍵はあるんだし、ゆつくり寝ている人はお好きなように。裕司、帰るなら帰る、ちゃんと、鍵は閉めてからにしてね」

肝心なことだけは、美子は口にした。

道の際から風が吹き上るようにして吹いたので、オーバーコートの襟を美子は立てた。駐車場に車が捨て置かれていたが、やはり、美子の視野の

内には入らなかった。

足だけは、石神井公園の方に向いていて、川沿いの道を歩いていた。

住宅が川に沿って立ち並んでいたが、十四、五分も歩くと、もう、公園の敷地の外れとなり、次第に、武蔵野の面影を残す、風致地区にと様相が変わった。冬の朝らしく、手足が冷たい。

それでも、三宝池を見渡せる場所まで辿り着いたら、カイツブリの親子が水辺に寄って来たので、思わず、「かわいいーい」と、美子は声を上げた。何度か、足を運んでいるから、見知った親子連れの鳥、渡り鳥ではないから、この池ではご常連さまというわけだった。

「それからーと、マガモ、オシドリ、向こうに、ゴイサギかあ。みんなコンニチハあ」

鳥の名を覚えているのは、バード・ウォッチングが趣味の一つであった裕司の影響によるものだった。特に、この冬の季節は『渡り鳥』も多いことから、この石神井公園は裕司がお気に入りであったのだ。

早朝とはいえ、老人夫婦などの散歩者はいたが、美子の目の内には入っていなかった。池と水面と、それに沿って広がる樹々、曇り空だったので、何となく足元は暗い。

いつの間にか、一人、美子は係留されていたボートに乗っていた。

無人なので、池畔（ちはん）に止められていて、咎める者もいなかった。

「いつもわたしが漕ぎ役、裕司はバード・ウォッチングに夢中か。あれは

あなたの世界で、わたしはお付き合い、まあ、どうしてもよかったのかも知れなくてよ。それでは、今日は趣（おもむ）きを変えて、すいすいと、自分のためだけのオール漕ぎつてことにしよう」

漕ぎ出すと、何羽かの水鳥が羽搏（はばた）いた。それほどの羽根音でもない。ゆつくりと、景色は動いているので、心が安らいだ。水面のさざ波も、オールの操作に合わせて、音も立てず沸いた。

ふと、水面に顔を出した亀の姿を、この時、美子は目に止めた。オールの先からは身をかわして、ほぼ、五メートル先の水面上であった。余り、美子は亀は好きではない。

姿恰好がグロテスクで気味が悪い。大体が池畔などに屯（たむろ）していて、甲羅干ししている姿などは怠け者にも見えた。

特に、誰かに似せて、そのようなもの思いを持っているのでもなかったが、視線の内に入れただけで、美子は無視した。それなのに、亀は執拗にボートを追い掛けて来た。そのように、美子には見えた。

「もう、いいかげんにしなさいって。気持ちの悪い亀首まで擡（もた）げてさ。何よ。一生懸命に泳ぐ真似なんぞしないでいいの。あっちへ行けえ」それでも、まだ、亀は水面に首を突き出し、稚拙な泳ぎ様のままに、水面をばたばたした。

今度は、美子はオールの先でばちやばちと水を掻いた。三メートルぐらい先の位置で、一旦、亀は水面に沈んだが、すぐに、首を出した。やっ

と、この時、美子の脳裏に、村尾裕司の顔が思い浮かんだ。

もつとも、何となくではあったが…。

「やだ、やだ。嫌な奴が付き纏（まと）うなんて。のろのろ亀、わたしをどこまで付けてくるのかしら。あっちへ行けって言っているのに、やだなあ」

危険を察したのか、亀は水面下に身を沈めた。水面に泡だけが浮いた。

もう、美子は亀の存在は忘れていた。どうでもよかった。

池の回りを何周したのかも覚えていなかった。

ボートを岸边に寄せると、美子は陸地に上がり、どこに向かうでもなく、一人、遊歩道をぼくぼくと歩いた。時間の感覚もなく、それに、北風も舞っているのに、寒さも感じ取ることはなかった。

そして、いつの間にか、アパートに辿り着いていた。ちらと室内を見遣（や）ると、ベッドが望めた。見知らぬ男が一人、ベッドに横たわっていると最初は思った。そばに寄って見て初めて、ベッドで寝ているのは裕司だと気が付いた。無感情のままだったのに、「裕司か。まだ居たの？そういうことか」と自問自答した。それからの動作は早かった。

ベッドの直ぐ端の位置にある、取り外し可能型の正四角形の収納庫を開けた。床下には取り外しが出来る箱が一つ据えられていた。

「ごちゃごちゃした小物類がその箱には収めてあったが取り払い、空所を作った。その下は、ガス管や水道管などが布設されており、コンクリート

床が広がっていた。両手で抱え取るようにしながら、裕司の体を運び、そして、その空所に遺体を移した。

足から入れたら不格好な様で上半身が残された。それで、蹲踞（そんきよ）しているようなポーズになり、やや、窮屈そうな姿勢で、遺体は収まった。顔が上向いていたので髪の毛の乱れた顔が美子の目に写った。改めてメガネを手に取り裕司の顔に掛けた。「目が見えなくちゃね。裕司が不自由しないように」と呟く。

死者を弔う心持が表されていたようでもあった。その癖、収納庫の扉がちやんと乱暴に閉めた。死者と縁を切ったようでもあった。

ごろりと、ベッドに寝転んだ。よく眠れたと見え、目が覚めたのは、遥かに午後を過ぎた時刻のことであった。腹が減って、また、牛乳をがぶ飲みました。そんな一日を過ごした。

裕司のことは気にならず、こうやって、美子は何日かを、いつものように費やした。正気の部分もあるらしく、遺されたままの裕司の乗って来た車は、石神井公園近くの雑木林内の空所に美子が運転をして移動させた。

それから、勤めにも行ったし、食糧補給にはコンビニにも寄った。すっかり、裕司の存在は忘れていたと言った日々も過ごした。

ちよつとだけ異変があった。三日目か、四日目、床下から匂う異臭を嗅いだ。台所に遺した生ものゴミの匂いかと、美子は最初に思った。パラの香のする消臭剤を買って来て、部屋中に巻いた。異臭の発生先には思い至

っていないふうがあった。もう一つ異変と言えば、職場で配置換えがあり、同じビル階ではあったが、江崎とは顔を合わせる機会が奪われた。

配置換えの理由を尋ねることもならず、一方的に、美子は江崎を恨んだ。相手にされていないと言う屈辱感も同時に味わっていた。

戸村裕司の失踪に関しては、親からの問い合わせもあり、すでに、警察が動いていた。交際相手についての仔細を質す段階で、江崎のところにも、警察からの問い合わせが入っていた。関わり合いを恐れてか、江崎は美子を遠去（とうざ）けたのだった。

一週間後、また、日曜日がやって来た。

「裕司さ、バード・ウォッチングに行くう？ね、行くの？行かないの？ほんと、のろのろカメ、まあ、就（つ）いて来たいならお好きなように…」

と、美子は床下の遺体に向けて問い掛けた。

別段、収納庫を目で確かめているふうでもない。どこか、視線は泳いでいた。いつものように、今日一日が始まるうとしていた。

朝の早い時刻、白い息が美子の口元を吐いて出た。

もう、江崎とは会えないと覚悟していたのか、化粧もしない素顔のままだった。女としての存在感もなく、放心している呈（てい）でもあった。

「私用のカギは持ったしとお。あ、そうそう、外は寒くい冬の季節う。手袋をしなくちゃ」

毛糸の手袋をしっかりと両手に嵌めた。

扉の把手（とつて）に手指を掛けた。ひよいと開けた。「うん？なに？」と美子は思った。慌てたように人影が扉の傍に寄って来た。

「葉室美子さんですね。ちょっとお聴きしたいことが、一、二、三あって、任意で結構なんですけど、警察署にご同行願えますか」

大の男が三人、それに、アパートの家主の中年男が付き添っていた。

途端のこと、灰色の風のようなものが、ゆっくりと広がりながら、美子の視野の内で巡った。ふふつと、風が足元で舞った。

肌で感じた風は冷たいと言うのでもなかった。

「あの人なら、ちゃんと居ますよ。さつきも、わたし、口を利いたばかりなの。中へどうぞ」

明瞭な口調だったので、皆な怪訝（げげん）な顔付きになった。

顔を出した女は取り乱したふうでもない。

この時、室内からの異臭を立ち会った者たちは嗅いでいた。

通報者からその情報が寄せられていた。皆な鼻を顰（しか）めた。

何気ないふうの、美子の台詞だが、辻褄が合っただけなのに、その実、どこか、辻褄は合っていないかった。

（了）